

[月刊]

キャッチ ピース

34

通巻113号/1995.8 定価100円

自衛隊の海外派兵を食い止め、大幅軍縮を！
米軍基地を撤去しよう！
反核運動を継続し、核廃絶を！
憲法9条を世界に！
市民による平和政策を提起しよう！
草の根の国際共同作業を進めよう！

フランスも中国も核実験を止めろ！



シラク大統領に核実験中止を求める
ハガキキャンペーン展開中！
上のキャラクター（ムルロア・ヤドカリ）をデザインした
ハガキ。一枚二〇円。（四頁に関連記事）



ナガサキに原爆が落とされた日に 東京・渋谷

核軍拡をストップするためにも 日本は軍縮を

核実験はいかにムルロア環礁を破壊したか
ファクトシート：フランス、中国の核
ナガサキ・ヒロシマ：50年目の夏
沖縄から：97年に向けた軍用地強制使用手続き

●維持会員（月額） ●参加会員（月額） ●通信会員（年額）

個人1口1000円 個人1口 500円 3000円
団体1口2000円 団体1口1000円

〈会費は本誌購読料を含みます〉

脱軍備ネットワーク
キャッチピース

西

荻窪のジャズスポット「アケタの店」に、久々に続けて通った。日本のジャズの最前線を走るプレイヤーたちが連日シャバドゥビヤと吠える、過激なる魔窟だ。何年ぶりかであるの狭い階段を降り、音の爆風を浴びたけれど、しかし改めて驚いたのは、その客の少なさだ。某月某日、高橋知己グループ。豪放なトーンが魅力のベテランテナーマンである。バラード・プレイの色っぽいこと。日本酒が進む。客、僕一人(一)。某日、榎本秀一カルテット。コルトレーン派と言うワクにとどまらない個性派テナー奏者。水割りが進む。客、四人。また某日、マルチリードの松風鉦一トリオ。凄いい！猛スピードで半音階を駆けめぐるねじれたメロディラインに僕は何度か死に生き返っては手拭いと替えパンツを持ってウイスキーグラスに飛びこむ。しかし、ああ、客はまたしても三人なのだった。いずれもこの世界では名のある、超一流の猛者・プロフェッショナルたちなのに。どう

「核実験抗議先」中華人民共和国大使館
フランス大使館

106 港区元麻布三―四―三三 電話〇三(三四〇三)三三八八 FAX(三四〇三)四九二五
106 港区南麻布四―一―四四 電話〇三(五四二〇)八八〇〇 FAX(三四四六)七三六一

したことだ。

夏になれば各地で、恒例の大きなジャズフェスティバルが開かれる。多くのにいちやんねえちゃんおっさんおぼはんじいちやんばあちゃんウシウマイヌネコタコイカバルタン星人等々で大賑わいだ。一方、狭い地下室で日々行われるライブは、客席に数人しかいない。わざわざ仕事を休み、前々からスケジュールを調整して時間をひねり出し、「非日常」であるジャズフェスにかけける。一方、日々の勤めを終えて、少しばかり寄り道して西荻なら西荻までカラダを運ぶ。終電を気にしながら演奏を聴く。実はそちらの方がエネルギーが要るのではないか。

生活上のストラグルは誰にでもある。生きる時間の大部分は、それに合わせねばならない。時間の方を自分の体に合わせることはかなわぬユメである。それが可能な人はあの偉大なるバカボンのパパくらいだろう。そうした日常からいつとき「よつこらしよ」と離れることよりも、日常の中に小

日常の中の「よつこらしよ」

さな「よつこらしよ」を持ち込むほうが実はシンドイように思えるのだ。
あの湾岸戦争やPKOと言った「大事件」の中で僕らの知り合った人たちの多くは、「それつきり」となってしまった。それを、通り過ぎる人々、と言い切ってしまう気は無論ない。多数派作りを目的化するのでもない。いずれにせよ、ヘンな言い方だけれど「波が引いた」あとの日常的なところで共に「よつこらしよ」してくる仲間を作り出すには、僕らの言葉と力は魅力に欠けるようである。

フランスの核実験再開と言う「大事件」が迫り、世界的に抗議の声が高まっている。キャッチピースもハガキ運動の形でその一端を担っている。止められるかどうか、それは最後まで分からない。しかしどうなるかと、ここで知り合い共に大きい「よつこらしよ」した(するであろう)仲間たちと、今後の小さくてもねばり強い、シッコイ「よつこらしよ」へつなげて行きたい。(シークの甥)

中国の核実験と日本の軍拡



8.27 横須賀港で (神奈川新聞より)

中国の核実験強行。十七日夜、キャッチピースもすぐに抗議文を送りました(十五頁下段に全文)。フランスと中国は世界が注視する中で、自らが核抑止力にとりつかれた「亡者」であることをさらけ出しています。
「もう核実験は止めた」とすずしい顔を決め込んでいるアメリカ、ロシア、イギリスは、もつと悪質な「亡者」です。つい四、五年前まで、今日のフランスや中国のように、環境を破壊し、放射能のまき散らしながら手に入れてきた巨大な既得権が守ること。それだけがこれ

ら「核先発国」の関心事です。
ヒロシマ・ナガサキから五〇年の夏、核抑止力の亡者たちが、今も世界を徘徊しています。

日本はどうか。与野党あがての核実験非難のかたわらで、連立与党は八月四日、来年度防衛費の概算要求基準に合意しました。本年度より二・九%増。これが「唯一の被爆国としての体験を踏まえて：国際的な軍縮を積極的に推進する」(八・一五「首相談話」)ことなのかと耳を疑いたくなります。

「防衛費」の削減を！ 構想反対！

中国が、自分の二倍以上の軍事費を持つたつての侵略国を脅威と感じないはずはありません。そして「思いやり予算」に支えられたアメリカの巨大な核の傘。日米安保の下での日本の軍拡が中国の核軍拡路線を後押ししています。
さらに危険きわまりない計画が進行中です。TMD(戦域防衛ミサイル)構想。中距離ミサイルによる攻撃を察知し、迎撃するハイテク計画です。中距離(核)ミサイルを持つている中国が「仮想的」なのは明らかです。
防衛庁は今年二〇〇〇万円の調査費を計上。来年度は四億五〇〇〇万円を要求していく方針を固めた、と報道されています。本格化すれば二兆、四兆円と軍需産業が涎をたらしそうな計画です。日本がこれを実行すれば中国は核戦力の増強、近代化によりいっそう拍車をかけるでしょう。
核実験の動きに目をこらしつつ、同時にアジアの軍拡競争を止めるためにも、日本自らの軍縮を求める声をさらに強めていきましょう！
(田巻一彦)



ハガキによせられた

声声声...

「もしもし、あの：フランスの「核実験に抗議するハガキの注文ですか？」「そうです。五枚でいいんですけれど」

「キャッチピースの新しい事務所小田原市の中学生Sさんからの電話が入った。毎日新聞の記事をみて思い切った電話をかけてきてくれたという。「福岡県かほ郡：喜ぶの下が加えるに稲穂の穂、嘉穂郡：九州からもフランスの核実験に反対する気持ちが伝えられた。」

大阪に住む友人が、これだったら思想や支持政党やいろんなことに関係なくみんなに渡せるからといって一〇〇枚申し込んでくれた。

ささやかであることを承知の市民の意思表示。けれど、東になってかかればいつかシラク大統領の胸に届くと信じてのハガキキャンペーン。私も、約束通り八月十五日渋谷駅頭

「お便りから」

●頑張つて核反対を続けてくださいネ！ 私の周りの人たちも快くPOST CARDを書いてくれます

(名古屋市のAさん) ●フランス核実験反対！ (柏市のYさん) ●フランスが核実験を再開するとはとんでもないこと。送っていただけるならハガキを一〇〇枚ほどお願いします (三原市のOさん) ●早速ハガキを送付下さいましてありがとうございます。今後又何かございましたら是非活動に参加させていただきますと思っております (港区のOさん)

●お知らせいただいた九月二日の代々木の集会に行こうと思っております。過去に核で死んでいった人々一人一人のことを考えずに核開発するなんて許すことはできません。人手

での「反戦マラソン演説会」でアビールをした。「キャッチピース」の編集会議は場所を事務所からデモ終了後の広尾の喫茶店(フランス大使館から徒歩五分。どうでもいい話ながらこのオーナーは、あの、あきなおみ)へ移して行われた。

が要り用ならご連絡ください(所沢市のTさん) ●友人、知人たちへ声をかけ賛同した方たちに参加しても話しました。世界のニュースを見ては、様々な人が声を挙げています。私たちに重要性を感じております。私たちの声がどうかシラク大統領の胸にずんと大きく伝わります様祈るばかりです(愛知県知多郡のNさん)。

●中国が堂々の核実験。「不要、核武器！」ハガキをどうするか。フランスへの抗議ハガキたいま八〇〇〇枚配布済み。一九九五年夏。暑い夏がいっそう熱さをまわしている。(山中悦子)



ヒルダ・リニー ● バヌアツ・元保健相

非核太平洋はみんなの願い
今こそ、目に見える行動でそれを表す時です

誰もが核実験に反対

太平洋のすべての政府、労働組合、教会、女性、青年、教師などあらゆる団体はいつかして核実験に反対してきました。それは今も変わりはありません。

バヌアツは、独立を勝ち取って間もない八三年に非核国宣言をしました。一九八五年に南太平洋非核地帯条約が採択された時には、その条約の内容が「弱すぎる」として加盟しませんでした。九三年、条約には加盟はしましたが、まだ批准していません。批准すると弱い方の条約に引きずられて自分たちの政策を貫けなくなってしまう、という理由からです。ところが、今のバヌアツの首相はシラク大統領と個人的

に非常に親しい人で、「核実験再開はフランス内部の問題である」という立場をとっています。しかし、バヌアツも参加している南太平洋諸国会議(十五ヶ国)はすでに、核実験再開阻止のために協調していくことを決めています。バヌアツも核実験の停止のために行動していかねばなりません。

フィジーだけでも五万人を超える署名が集められました。南太平洋労働組合協議会はフィジーで会議を持ち、フランス製品のボイコットを決めました。NFIP(非核独立太平洋運動)は、南太平洋諸国会議の年に一度の会議(ここには例年日本、フランス、イギリス、アメリカ、中国も参加しているのですが)へのフランスの参加を拒否することを要求しました。

タヒチでは非常に運動が盛り上がり

ています。大きな集会やデモが開催され、抗議船団がムルロアに向かう準備をしています。タヒチ独立運動はこの三年ほど激しさを増して、暴力的な事件もしばしば起こっています。フランスが民衆の要求に耳を貸さうとしなからずです。ビジネスマンは次々とバヌアツ等に逃げ出しています。

気になる日本の動き

今日私は十五人ほどの日本の非核派の国会議員と会いました。ある議員は、日本はアメリカの核戦略に依存していると言いました。しかし、核兵器はすべてを破壊し、何も守りません。日本の核廃棄物の太平洋での海洋投棄とブルトニウムの海上輸送についても



ヒルダ・リニーさんは、1993年5月のWHO(世界保健機構)総会が、国際司法裁判所に核兵器の合法性に関する『勧告的意見』を求める決議を上げた時、その立役者となった人。原水禁世界大会参加のため来日した。8月3日横浜で行われた集会(主催：95年を核のない世界への転換点に運動)でのスピーチから。(文責：田巻一彦)

話し合いました。ある議員は、海洋投棄は日本国民の多数が反対しているの、最終的には停止されるだろうと言っています。しかし、プルトニウム海上輸送の元凶である、日本とフランスの使用済み核燃料再処理の協定を見直す可能性については明確な答えはありませんでした。

目に見える行動を

原水禁大会で、私とフランスやドイツの人々との間でフランス製品ポイコットをめぐる論争がありました。私はポイコットを主張し、彼らはそれに反対しました。フランス世論を逆に追い込む結果になる、という理由です。しかし、決議や文書だけでは不十分です。実際に効果的な行動が必要で、ポイコットや艦船の入港拒否など目に見える行動が必要です。オーストラリアではフランス・レストランがポイコットにあつて現地のフランス人の間から本国政府への批判の聲があがっています。たしかにバヌアツのような太平洋の国々は人口が少ないので影響はたかがしれています。しかし日本がポイコットすれば効果は絶大です。日本はあらゆる意味で非核の実現へのカギを握る国です。

太平洋短信

PACIFIC NEWS BULLETIN 95.7より

- フランス部隊によるグリーンピースの「虹の戦士襲撃」に対して、太平洋各国から一斉に抗議の聲があがった。南太平洋諸国会議のタバイ事務局長は、この事件によって同会議加盟諸国がフランスに抱くイメージはさらに悪化したと述べた。
- フランス革命記念日の七月十四日、最大の行動はフィジーの首都スバで行われた。フランス大使館に五万人以上の署名を添えた抗議文が手渡された。ウェリントン、シドニー、メルボルン、ニューヨーク、ワシントンDC、ロンドン、バンクーバー、トロントそしてバリでも大規模な行動があつた。
- バヌアツでは、政府が七月十四日の集会を不許可にし八月に延期するよう指示、NGOは一斉に反発した。首相は「核実験を受け入れるか否かはフランス領ポリネシアの住民が決めることだ」と語った。バヌアツ国民の七〇%以上は実験に反対している。
- 南太平洋諸国会議の抗議団に対し、フランス政府は各国への財政的貢献を強調、経済援助打ち切りをほめた。
- 南太平洋競技大会のポイコットを決めたのは、西サモア、アメリカ領サモア、ナウル、ニウエ。理由を明らかにしないが不参加をきめたのは、ツバル、トケラウ、マーシャル諸島。他の国でも競技団体や選手が自主的にポイコットする動きがある。
- トンガとクック諸島では、NGOや野党が政府に核実験反対を明確にするよう求める声を強めている。
- ニュージーランド政府は、法的対抗措置を検討するとともに、ムルロア環礁に向かう平和船団を支援するために船を送る。

核実験は ムルロアを こんなに 破壊してきた

(Pacific News Bulletin, 95.7より) 表題は編集部

ムルロアにおける地下核実験の環境上の安全性は大きな論争点となってきた。ムルロアと姉妹実験場のファンガトファはいずれも玄武岩層上の透水性サンゴ礁である。そしてそこには今ではチェルノブイリ並の放射性物質が蓄積されている。核実験はこの脆弱で不安定な地質学的環境を脅かし、その結果大量の放射性核種を海洋環境に漏出している。

一九七五年以来、一三〇発以上の核弾頭が環礁内の実験用縦坑の底で爆発した。その結果、巨大な空洞が生じ、それらは溶融した岩石と放射性物質で満たされた。岩石の破碎によって、放射性物質の一部は、空

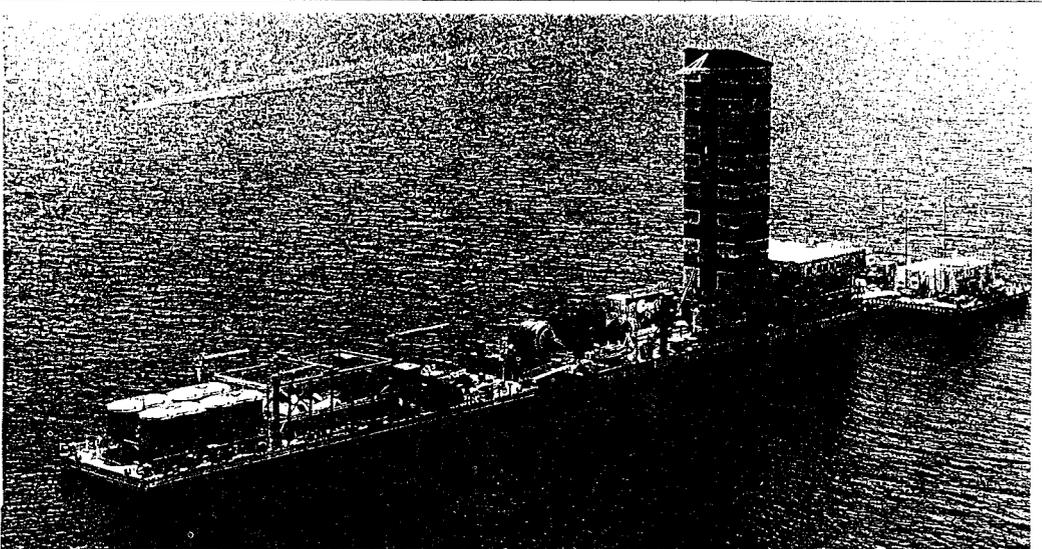
気に放出されたり海中に浸出したりした。フランスの専門家たちは、実験は安全であると主張した。これに対して、いくつかの調査団が、実験サイトに立ち入ることは厳しく制限されたながらも、地下核実験によって放出された放射性物質が環境を汚染している可能性について深刻な問題を提起した。

一九八一年、フランスの地質学者アロン・タジエフの調査団は、核実験を継続した場合の環礁の長期的な地質学的安定性について警告を発した。一九八三年には、ニュージーランド・オーストラリア・バプアニューギニアの調査団がトリチウム濃度の上昇に加え、環礁深い亀裂が生じており、環礁の一部では一メートル以上の地盤沈下を起こっていることを発見した。一九八七年には、ジャック・クストーが、ムルロアのラグーンでセシウム134やヨウ素131など短寿命核種を検出した。これは、核爆発からの直接漏出がすでに起こっていることを示唆している。クストーは環礁の巨大な亀裂と海底における地盤のずれと沈下の模様をカメラに収めた。彼は、核実験の影響を次のように述べた。「環礁は

急激に劣化している……これは次の最大規模の核実験をファンガトファに移して行うことの重要な根拠になる」。一九八八年、フランス政府は以後の大規模核実験はファンガトファで行うと発表した。

一九九〇年、グリーンピースの調査団は、実験場への立ち入りを拒否され、十二マイルの禁止区域外での調査しか行えなかったが、プランクトン中に天然には存在しない放射性物質が存在することを発見した。一九九一年、グリーンピースの調査結果に反論するためフランス軍によって招かれた国際原子力機関(IAEA)の調査団は、環礁から十二マイルの地点で採取したサンプルから高レベルのプルトニウムを検出した。

ムルロアとファンガトファでこれ以上実験を続けられれば、環礁の環境破壊はさらに進む。フランスの実験場における全面的かつ中立的なモニタリングが必要である。同時に求められているのは、完全に中立的な疫学調査と、核実験による環境と健康への影響に関し、フランス当局が保有している情報を全面的に開示することである。



ムルロア環礁の核実験用バージ (S. Norris "Nuclear Weapons Data Book" 16)

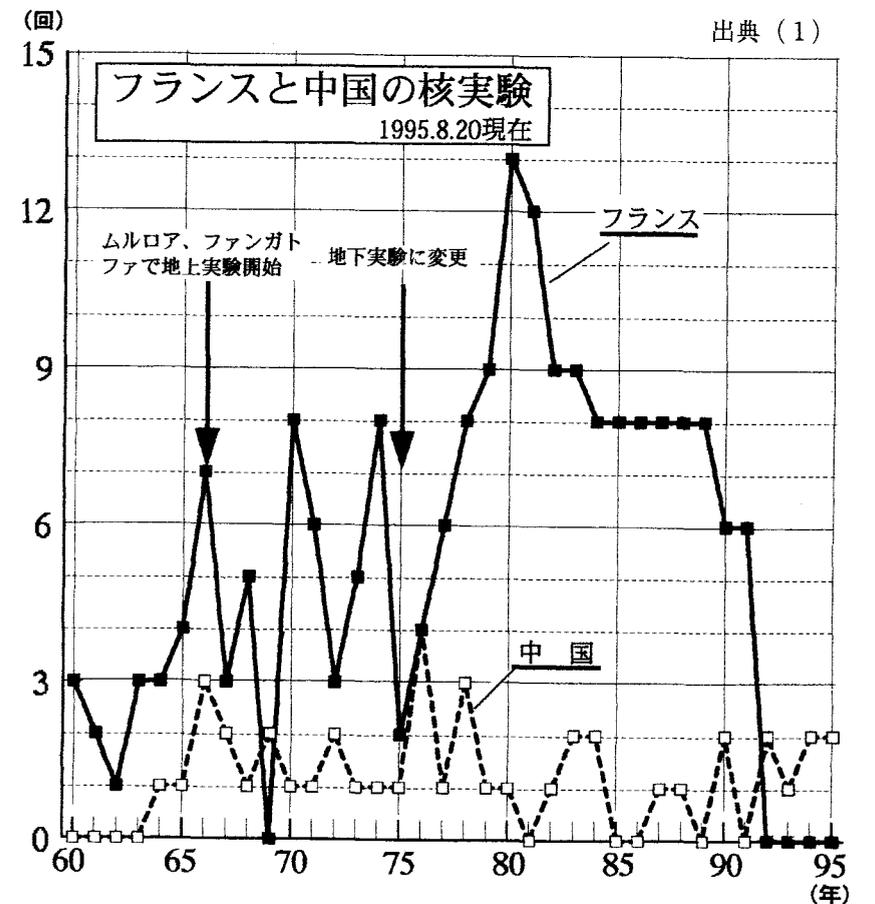
フランス 中国の 核実験と 核兵器

フランス

最初の核実験は約六五キロトンのプルトニウム爆弾で一九六〇年二月にアルジェリア(当時フランス領)のタネツロフ砂漠で行われた。六〇年から六一年にかけて四回行われた最初の実験シリーズは大気圏実験であった。アフリカ近隣諸国は激しく反発、一時的に国交を断絶する国もあった。その後地下実験に変更されアルジェリアでの実験は一九六六年まで行われた。

六二年にアルジェリアが独立。以降フランスは、南太平洋の植民地にある二つの環礁、ムルロアとファンガトファを実験場として選んだ。これらの環礁自体は無人であるが、東、西そして北側には人の住んで

- 出典：
 (1) S. Norris & W. Arkin, "Bulletin of the Atomic Scientists"
 (2) S. Norris 他, "Nuclear Weapons Databook"
 (3) ピーター・グレイ著「核兵器の拡散防止について」



われている。ムルロアでの地下実験は当初環礁外環(リム)に掘られた深さ一〇〇〇メートル前後の縦坑の中で行われていたが、一九七〇年代末には、外環部は、実験場の労働者の表現を借りれば、スイスチーズのように穴だらけになるほど使い尽くされ、実験場所はラグーン中央部に移された。

る島々がある。フランスは、実験は風が南に向かって吹いているときに限ると約束した。ムルロアでは一九六六年から一九九一年までの間に四二回の大気圏実験と一三九回の地下核実験、ファンガトファでは五

七十年代前半、核実験の主たる目的は潜水艦発射弾道ミサイル用弾頭の改良におかれていたが、その後、より小規模な戦術核兵器(航空機用など)の開発が開始された。フランスは九三年半ばの段階で五二四発の核弾頭を保有している。そのうち三八四発が潜水艦発射ミサイル用の弾頭である。

回の大気圏実験と八回の地下実験が行われた。一九六八年八月には、最初で最大の熱核爆弾、二・六メガトンの大気圏実験が行われた。

運搬手段	核弾頭数×爆発力	弾頭種類	貯蔵弾頭数
航空機			
ミラージュ IVP/ASMP	1×300kt	TN 80	18
ミラージュ 2000N/ASMP	1×300kt	TN 81	42
地上発射ミサイル			
SSBS S3D	1×1mt	TN 61	18
アールトン	1×10/25kt	AN 51	42
アール	1×to 80kt	TN 90	(30)
潜水艦発射ミサイル			
MSBS M4A/B	6×150kt	TN 70/71	384
空母配備航空機			
シパールエタンール	1×300kt	TN 81	20
計			524

運搬手段	核弾頭数×爆発力	貯蔵弾頭数
航空機		
Hong-5(B-5)	1×bomb	合計 150爆弾
Hong-6(B-5)	1~3×bombs	
Qian-5(A-5)	1×bomb	
Hong-7(B-7)	1×bomb	
地上配備ミサイル		
Dong Feng-3A/CSS-2	1×3.3mt	50
Dong Feng-4/CSS-3	1×3.3mt	20
Dong Feng-5A/CSS-4	1×4~5mt	4
Dong Feng-21/CSS-6	1×200~300kt	36
Dong Feng-31	1×200~300kt	?
Dong Feng-41	MIRV	?
潜水艦発射ミサイル		
Julang-1(CSS-N-3)	1×200~300kt	24
Julang-2(CSS-N-4)	1×200~300kt	?
戦術核兵器		
砲弾/ロケット/核地雷	低kt	150
計		524

中国

最初の核実験は、一九六四年十月に二〇キロトンのウラン爆弾で行われた。最初の熱核爆弾は三メガトンで、一九六七年。最大の核爆発は一九七六年の四メガトンである。

弾頭保有量は確かな数字はないが四五〇発と推定される。

最初の中距離ミサイルを一九八一年に配備、一九八六年に最初の潜水艦発射弾道ミサイルを配備した。(出典2、3)

英国の国際戦略研究所が発行する「ミリタリー・バランス」(一九九四―九五年版)は、中国が九三年十月に実施した核実験が五十―百キロトン、九四六月は十―六十キロトンと規模が異なっていることに着目、「一連の新兵器が開発されていることを示唆する」と結論づけている。

沖縄から

沖縄がかわれば、アジア・太平洋がかわる

報告⑫

「沖縄から」
「オキナワボイス」
編集委員

伊波洋一
(沖縄中部地区事務局長)

〒901-22
沖縄県宜野湾市志真志517-1
沖縄キリスト教平和センター-気付
TEL (098)898-6628
FAX (098)897-6953
郵便振替 鹿児島 2-11249

九七年にむけた強制使用手続き

前号に続き、強制使用問題を報告する。
今年三月三日、九七年五月十五日の期限切れに向け、防衛施設庁が強制使用手続きを開始した。県内にある四十三の米軍基地のうち十三の基地に及ぶものであり、地主二千九百十九名の面積三十八万七千平方メートル、二六一筆の土地の強制使用手続きである。
うち二筆は、嘉手納基地と普天間基地にあ

る一坪反戦地主二千八百二名の共有地。さつそく、三月四日には契約拒否地主に那覇防衛施設局からの「強制使用意見照会文書」(三月二十四日期限)が届き始めた。

強制使用手続きの経過

三月二三日 反戦地主九十名、全電通の一坪反戦地主百二十三名分の意見書提出。
三月二四日 一坪反戦地主会約三十名の意見書提出を那覇防衛施設局が拒否。
四月六日 那覇防衛施設局が米軍用地特措法に基づき二施設四名の未契約地主に対する強制使用認定を内閣総理大臣に申請。
四月七日 一坪反戦地主会が意見書「受領拒否」で防衛施設局長の謝罪を要求。
四月十四日 意見書提出を締切る。結局、過去最低の意見提出率一・一％。八七年四四％、九二年三二％だった。

四月十七日 那覇防衛施設局が二千九百名の地主について強制使用の認定を申請。
四月二五日 軍用地違憲共闘、反戦地主会等で構成する「軍用地の強制使用に反対する要請団」が東京行動。衆参両院議長、防衛庁外務省などに強制使用中止を要請。
五月八日 村山総理が強制使用を認定。
六月三、四日 那覇防衛施設局が、土地物件調書作成の図面縦覧を県内十カで実施。

知花昌一さんの所有地で、昨年父親から譲り受けたもの。父親は復帰当初、契約拒否地主だったが、七六年に契約に応じた。防衛施設局が主張する期限のない契約の二十年の最長期限が九六年三月三十一日に到来する。

代理署名した革新自治体の出現

那覇市、沖縄市、読谷村は革新自治体として五年前に引き続き代理署名を拒否したが、宜野湾市と北谷町が革新自治体として初めて代理署名したことは衝撃を与えている。
特に、市内外から一万七千人が参加して五月十四日に基地撤去を掲げて普天間基地包囲大行動を行なったばかりの宜野湾市の代理署名に多くの市民と反戦地主が落胆している。

宜野湾市の普天間飛行場には五八三名の契約拒否地主があり、宜野湾市の代理署名は県知事への代行要請の拒否地主数が激減することになった。

市長発言と全く違う宜野湾市の対応

桃原正賢宜野湾市長は、五月九日付沖縄タイムスで「地主の自由意志を尊重する観点から、拒否の姿勢を貫いていきたい」と述べ、六月十二日付琉球新報インタビューでも「人の心を代理することはできない。人権、人格を尊重するのが民主主義。市長にそれを否定

六月七日 那覇防衛施設局が図面確認を拒否した未契約地主の土地について所在市町村長に代行要請を開始。
六月八日 反戦地主会が各市町村長に代理署名拒否を要請。

七月二七日 沖縄タイムスが革新自治体宜野湾市と北谷町の代理署名を一面トップで報道。那覇市、沖縄市、読谷村は拒否。
八月十六日 一坪地主会が緊急集会を開催し、代理署名に応じた市町村を批判。
八月二一日 那覇防衛施設局が、那覇市、沖縄市、読谷村の地主三十三名、三万五千平方メートルの未契約軍用地について、沖縄県に八月二十八日指定で代理署名を要請。大田県知事は慎重に対処するとコメント。
今後、手続きは図のように続く。

注目される楚辺(ソベ)通信所

八月二二日付沖縄タイムスは、読谷村にある楚辺通信所(通称・象のオリ)の一角が一年早く、九六年三月末で使用期限が切れることを明らかにした。
楚辺通信所は外国の放送や通信、航空機の無線傍受を専門的に行なっている施設で、手続きがおけると、公開審理の開催が遅れて強制使用裁決が間に合わなくなる。
この土地は「日の丸焼却裁判」を係争中の

「として使われていく可能性がある。

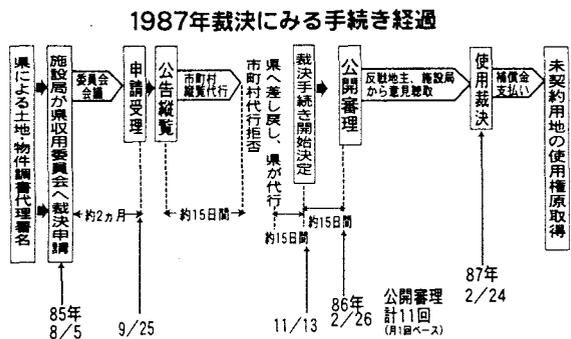
去年「沖縄は軍事基地との共生・共存すべき」との宝珠山防衛施設庁長官発言に反対し墜落事故の度に基地撤去を唱えてきた二革新自治体は、補助金獲得のため「軍事基地との共生・共存」にからめとられたと言えよう。

三事案に続くべき普天間基地撤去

この数年で普天間基地は大きく変貌し、米国の軍事予算削減で閉鎖された米国内外の基地から部隊が移駐し、飛行場で訓練の多くを実施するようになった。毎日のように午前七時から深夜十一時まで住民地域上空を米軍ヘリや軍用機が旋回する訓練が続く、墜落事故や落下事故も各地で相次いでおり、普天間基地周辺の生活環境は著しく悪化している。

生活環境の改善のためだけでなく、市中央を占める普天間飛行場は二一世紀の中部地域開発の最重要拠点と位置付けられており、三事案の次に普天間飛行場返還というのが沖縄県を含めたコンセンサスとなってきた。今回の宜野湾市の代理署名は、これまで積み上げてきた普天間基地撤去にむけた運動の取り組みに水をさすものである。

今、米軍と日本政府が仕掛けている革新自治体の「現実対応」に歯止めをかける取り組みが求められている。



する権限までは与えられていない」と拒否の意向を明確にしていた。六月末も「代理署名拒否」を要請した違憲共闘会議や拒否地主連に桃原市長は同様の発言で拒否の立場を明らかにしていた。
それが一転して、防衛関連補助金を理由に「八万市民のため、目をつぶる」と説明して代理署名した。宜野湾市は何に目をつぶったのだろうか。市民のためではなく、むしろ、米軍や防衛施設局と仲良くするため八万市民の基地被害や基地撤去を求める声や自らの基本政策に目をつぶったのである。
地元紙は今回の事態を「現実対応」と表現したが、この言葉は防衛補助金を得るために革新市政の立場を放棄する「呪文(じゅもん)

「反侵略と反核」 を常にセットで

舟越耿一 ● ピースウィーク実行委員会

長崎

の市民運動は、毎年八月一日から九日まで、ピースウィークと称して多彩な平和運動を展開する。今年も九月目。今年のキャッチコピーは、実行委員の投票によって、「ナガサキ発！これからの五〇年へ！」となった。惜しくも二位となったコピーは「五〇年がなんだ！来年もやるぞ！」だった。要するに、ポスト五〇年が長崎の市民運動の問題意識だった。

しかし、かと言って、まずコピーがあつてその後から諸企画が決まるのではなく、実際には、諸企画が先行して決まっていく過程で徐々にピースウィーク全体の雰囲気形成

され、コピーも決まってくる。

もっとも先行した企画は「戦争と原爆」展だった。スミソニアン事件を契機として、日米とアジア諸国に通用する原爆観の形成が急務であると考えられた。紆余曲折があつて、韓国での原爆展を皮切りとすることになった。パネルの構想、制作が進む中で、韓国展に当たって、日本人はどのような基本姿勢をとるべきかということについてあらゆる角度から検討した。パネルも日本の侵略に始まる因果関係の中にヒロシマ・ナガサキを位置づけた。

七月二五日からのソウル展の反応は予想通りだった。「原爆を言うことで自分たちの罪を隠べいしよう」とし

ているのだ」「日本人は原爆の話をすべきではないし、その資格もない」等々の反発がよせられた。マスコミもほとんど報道しなかった。その他いろいろあつた。

端的に言って、日本からアジアに発信すべき平和のメッセージは、反核ではなく、戦争責任の明確化と戦後補償つまり反侵略である。私たちはこのことを昨年の七三一部隊展のときに明確に文章化していた。つまり、ノーモア・ナガサキと言う前に、ノーモア南京、ノーモア従軍慰安婦人、ノーモア七三一、ノーモア強制連行が語られなければならない。しかし長崎は、原爆攻撃をされた

街として反原爆、反核を世界に訴えるべき歴史的使命を帯びている。

したがって要するに、私たちは、常に同時に反侵略と反核をセットで訴えなければならないことを改めて確認したのである。

◆ 今年の長崎は、県や市主催の何十という「五〇周年記念事業」があつた。はじめは、それらの大型企画の中に埋没するのではないかと思えた。ピースウィークではあつたが、完全な独自性とアピール性で予想以上の健闘であつた。八月八日には、初めて端島(軍艦島)、高島を巡る四時間のピースクルーズを実行したが超満員であつた。端島を目前にした韓国人・徐正雨さんの証言も圧巻だった。九日の市民集会もピースバスも例年通りの水準だった。市民集会には、年々内外からの参加者が増加していることも特筆すべきである。八日も九日も日本の侵略責任、加害責任を問うことが主題であつたことは言うまでもない。

七月七日には県議会でもいわゆる戦没者追悼決議が行われ、七月二六日には明仁・美智子が来崎した。いずれも「阻止」などはできなかったが、抗議行動はした。「慰霊の旅」だからいではないかという雰囲気の中で、私たちは天皇制の戦争責任を真正面から問ひかけるピラをつくり配つた。まことに天皇制というシステムか

ら国民意識のレベルにまで、戦後五〇年は旧体制の残存物に支配されたままであることがよくわかつた。ポスト五〇年も、やはり、この連続する旧体制という現実との対決抜きには考えることはできない。平和を求めるとき、戦争責任と天皇制は相変わらず当面の課題である。このことを実感した八月であつた。

市の平和宣言も 「加害」に触れる

久野成章 ● 平和に生きる社会を創るヒロシマの集い実行委員会

広島

被爆五〇年の広島訪問客の多さは、例年以上の外国のメディアの取材陣の多さにも端的に現れていました。私たちの集い準備は例年に比ばだいぶ遅れてしまひ、なかなか宣伝が浸透しなかつたにもかかわらず、関東・関西の人を中心にますます集まっていただきま

した。今年の平和に生きる社会を創るヒロシマのつどいは、八月五日六日の両日、「被爆五〇年・軍都一〇〇年ヒロシマは何を伝えていくべきか」というメインテーマで広島市内カレントコスモを会場にして開かれ約三百名が参加しました。まず、五日正午半より、炎天下の



原子力艦 入港情報

(75)

1995.6.7.26~8.18

S=原子力潜水艦(原潜) スタージョン級
L=原子力潜水艦(原潜) ロサンゼルス級

◆ 7/27	14:09	原潜ヘレナ(L) 横須賀に入港。
◇ 7/31	10:00	原潜ヘレナ(L) 横須賀を出港。
◆ 8/5	14:03	原潜ニューヨークシティ(L) 横須賀に入港。
◇ 8/6	09:57	原潜ニューヨークシティ(L) 横須賀を出港。
◆ 8/14	14:14	原潜シカゴ(L) 横須賀に入港。

●1995.1.1から8.18までの各地の原子力艦入港回数：()内は原潜

・横須賀	18 (18)
・佐世保	5 (5)
・初任ビーチ (沖縄・勝連町)	5 (5)
合計	28 (28)

中国の核実験強行に対する抗議文 95.8.17 キャッチピース

在日中華人民共和国大使館

私たちが日本国内各地の平和と軍縮を求める市民と諸団体の連合体は、本日貴国が今年2回目、通算43回目の核実験を強行したことに対して、怒りと失望を表明するとともに、強く抗議するものです。

本年5月15日に続く今回の実験強行は、この4月のNPT延長検討会議における「核実験の自制」の原則を踏みにじるものであることは言うに及ばず、来年の包括的核実験禁止条約締結の一つの中間的到達目標として、世界的に高まっている核廃絶の国際世論に真っ向から敵対するものです。

私たちは、軍縮と、民衆レベルの理解と連帯、互恵の精神に立脚した、アジア・太平洋地域の新しい安全保障秩序の構築を支持します。その目標を達成するために、日本の軍備削減、米軍の前進配備の停止、そして日本の過去の侵略行為に対する謝罪と公正な償いを求めて様々な活動を展開しています。その目標と原則に照らして、貴国の核実験は絶対に容認することはできません。貴国の核戦力強化は、この地域における相互不信と軍拡、緊張を増幅するだけです。

最後に、核物質によって地球環境を破壊し、人々を脅かし、核戦争の恐怖を未来の世に押しつけることは、どのような大義名分をもってしても正当化しない絶対的な犯罪であるという、価値観を貴国が再確認することを、かつて核兵器による惨禍を経験した隣国の民衆として切に訴えます。

もう2度と核実験を行わないことを、世界に向かって約束してください。

この抗議文に対するご返事をお待ちしています。

一九九五年八月十七日
脱軍備ネットワーク・キャッチピース

な運動が元気で、かつ、「当事者能力」をつけていくことの必要性が提起されました。その後ピースサイクル・生活クラブ長野・関西共同行動・日本の戦後責任をハッキリさせる会・反天皇制運動連絡会・広島などから発言があり、戦後補償問題の具体的な取り組みの中から私たちの被爆・敗戦五〇年以降の運動をスタートさせていくことを確認しあいました。

ちなみに翌七日から九日までは、長崎に移動しここ数年連携してきたピースサイクル長崎の人たちと交流を深め、日本の加害責任を問うている私たちが平和の発信を確かなものにしていくために来年以降も元気づくさらに努力していくこと及びこの九月のフランス核実験再開反対のヒロシマ・ナガサキアピールを発信していくことを約束してきました。

原爆ドーム前でピースサイクルの広島到着集会が自転車五〇台を含む一〇〇名で開かれました。午後二時半からの第一部証言のつどいは、「侵略戦争と原爆―癒えない痛手」というテーマで、韓国人女性の李貞分(イ・キブン)さんが日本軍の従軍慰安婦にされた体験を、また、被爆者の沼田鈴子さんがその話を受けての被爆体験を語りました。二人の女性が語った戦争と原爆、そしてその後の五〇年と今の思いを二百名近くの参加者がじっと静かに耳を傾けて聞きました。ひとりの教師に引率されて参加した二〇名ほどの高校生は証言のあとも熱心に資料を求めています。

夕方からの第二部の対話と討論では一五〇名の参加者で、第一部の証言に対する率直な感想を会場から出してもらいました。概念的な説明的な調子ではなく感じたことをそのまま六人の女性がのべたのが印象的でした。また、戦争責任の取り方の日・独の比較、アメリカ合衆国民衆からみた原爆投下と日米経済摩擦下の論

争、フランス核実験再開問題と国会決議に関してどう反核運動の内実をつくるのかについての提案など様々な意見が、落ちついた雰囲気の中で活発に述べられました。

第三部の懇親交流会ではそれぞれ発言していない方から運動の報告・宣伝をしていただき、さらには青森・関東・中部・関西・四国・広島と各地域からの参加者の紹介で盛り上がりました。

翌日、六日は平和公園噴水前に七時に集まり、「もうひとつの平和宣言(例年の市民による平和宣言)一万枚を配布しました。広島市の祈念式典に六万人の参加者があったということとであつと云う間に配りおえてしまいました。広島市の宣言に私たちが繰り返し主張していた「加害」という文言が入ったことは、私たちの宣言が今まで以上に具体的な課題・運動の方向性含めてわかりやすく、説得力ある宣言にさらに挑戦していかねばならないことを教えているのではないかと感じた次第です。

原爆投下時刻八時十五分には、原

爆ドーム周辺でダイ・イン行動、その後は平和公園の東側・元安川沿いに歩き二八〇名でデモ行進し、中国電力前での電産中国の反原発ストライキに連帯する座り込みを合流しました。十時からの第四部「小さな運動の大きな連帯をめざし」の討論集会には約六〇名が参加し、まず、司会から報告を受けました。それによれば、この「8・6」を前にオーストラリアの「ノーモア・ヒロシマメルボルン共同行動」から「①核実験中止②タヒチの独立③オーストラリア産ウランウムの採掘と輸出の禁止の三点の主張を掲げ日本の運動に連帯する」というメッセージが届けられたこと。ヒロシマのつどいとしてこのグループに連帯メッセージを送ったこと。オーストラリア政府に大使館を通じて抗議文を送ったこと。

次に、ピースリンクの湯浅さんからフランスの核実験再開と日本の軍費増の問題をつなげて目先の課題とともに中期的な目標を持つことの必要性、大きな連帯のためには小さ



湯浅さんの本

● キャッチピース運動コーディネータで広島県呉市に住む湯浅一郎さんの、この10年間の著作が本になりました。

一戦後50年を経て、原爆被害都市「ヒロシマ」

は、平和な都市として蘇ったかに見える。が、周辺には核、基地、戦争の影が色濃くただよっている。「ヒロシマ」の平和、そして日本の平和を鋭く問う。

[内容構成]

- 湾岸戦争がヒロシマを走った
- ヒロシマの核
- ヒロシマの基地
- 核と基地からの解放のために



- 技術と人間刊 A4版224頁
- 定価2000円+税
- 申し込み先
「技術と人間」社 TEL03 (3260) 9321
FAX03 (3260) 9320
呉YWCA TEL/FAX0823 (21) 2414
*10部以上1割引(送料無)

会計報告

(95.4.16~95.8.23)

[収入]

○前月からの繰越し	77,069
○今月の収入	833,000
会費収入	609,000
(内訳) 維持団体	72,000
維持個人	117,000
参加団体	12,000
参加個人	51,000
通信会員	357,000
カンパ収入	224,000
預金利子	0
資料収入	0

[支出]

●今月の支出	673,287
事務所代(5~9月)	180,000
水道光熱費	12,602
電話FAX費	36,877
郵送費	232,868
文具・備品	11,870
印刷・コピー代	190,420
郵便振替等手数料	8,650
雑費	0

●次月への繰越し 236,782

*平和資料協同組合(準)の資料収入は別会計とします。

*行動費は行動プロジェクト毎の独立採算となっているため、それにあてはまらない収支のみがこの欄に計上されます。

月刊キャッチピース

No. 34 (通巻113号)

発行●脱軍備ネットワークキャッチピース
連絡事務所●〒222 横浜市港北区錦ヶ丘
10-4 ハイッ幸1-B

☎ 045(433)3483

FAX 045(593)1824 (田巻気付)

編集●月刊キャッチピース編集委員会
郵便振替●00160-7-136148キャッチピース
定価●1000円(通信会員年間3000円)

会計係から
● 四カ月分の会計報告です。会費とカンパ本当にありますがとうございます。しかし、重なる借金の精算などをしてみると、意外と手元に残るのは少なく心配です。引き続きご支援をお願いいたします。(や)

編集室から
● 業務連絡。連載「基地周辺住民の意見」は紙面の都合で休みました。しかしまあ暑い。編集作業も少しは涼しい夜中を選んでということに。したがってオジサンは寝不足で昼間はぼーっとしているのだ。だからみだりに話しかけないように。(た)